

TREC project

総括 最終報告会

伝統技能の現代化を目指すデザイン 知財のマネジメント戦略

富山大学芸術文化学部教授 前田 一樹



TRECプロジェクトについて

本プロジェクトは、平成20年度文部科学省の産学官連携戦略展開事業（戦略展開プログラム）として、富山大学芸術文化学部が取り組む「伝統技能の知財保護とその現代化」の戦略プロジェクトとして始まり、平成22年度より大学等産学官連携・自立化促進プログラム【機能強化支援型】「特色ある優れた産学官連携活動の推進」として平成24年度で最終年を迎える補助事業であった。

平成20年、21年の本事業の活動の中心は「伝統技能の伝承方法、人材育成方法の検討」、「伝統技能の知的財産化への検討」、「伝統技能の現代化への検討」であり、3年目以降の事業目標および活動の中心は①産学官連携体制の強化、②伝統技能の知財化・資源化、③デザインマネジメント人材の育成であった。

これらの年次目標から、産学官連携機能の強化を進めていく上で、伝統的産業の根底に共通する職人技や、伝統文化の発展に関わってきた職人とは、伝統技能の伝承がなされて来た土壌としての主たる要素とは何かなど、伝統文化の源泉と潮流と未来について、歴史的、文化的、産業的視点から「あるべき生活世界の形成」を見据えながら、産学官が知の共有を図る取組みを行ってきた。

県内の行政、産業界、教育機関による「高岡地域職人技のブランド化推進協議会」を推進し、産学官が一体となって職人技のブランド化事業を実施するとともに、継

続的な地域イノベーションの創出と後継者育成を支援する体制を構築し、地場・伝統産業の振興を目指した。

■第1部 アドバイザーミーティング

「TRECは最終年度を迎えるが、継続すべきものを選び、形を変えて、高岡富山に限らず職人技を基礎とした地場産業を持つ各地に展開していければと思っている。その際には広い意味でグローバルな見方が必要になってくるだろう」という前田一樹の進行により始まった最後のアドバイザーミーティング。すべてをここでは紹介できないが、それぞれの言葉の向こうにTRECの成果と、今後の課題が見えてくる。

廣瀬 TRECをずっと見ていて思うのは、あるものを掘り起こすという、かなり考古学的活動であるということ。ポイントはこれからどうするかであり、取出した要素技術、エッセンスを継承することができればその技術もまた自ずから継承されるだろう。そのために大学としてはいかにカリキュラム、講座に落とすかだと思う。

近藤 教育へ落とし込むという方向は新鮮。単なる基礎・応用のようなとらえ方でなく、体系的教育と相互に影響し合って変化をうながす力になるのではないか。

高辻 プロジェクト終了後の展開については大学、文科省も考えている点だ。「科学的解明」の取組みで、良い音の減衰振動についてこのように数値化できた。それを



富山大学長
遠藤 俊郎



富山大学
前芸術文化学部長
秦 正徳



文部科学省
大学技術移転室
工藤 雅之



経済産業省
中部経済産業局
岩田 則子



高岡地域文化財等修理協会
会長
大澤 光民



高岡市産業振興部長
坂下 照夫



金属的に見るとどうか考察すると、研究としても展開が考えられるし、「音と心地よさ」、宗教音と捉えそちらにも展開ができる。

廣瀬 ともしれば技術的な展開のみになるところを、芸術文化学部の特性を考えると「美しさ」を技術と結び付けて考えられる、きわめてユニークなアプローチだ。

竹村 ポイントは、他の地域や大学にもTRECの成果を活用してもらえるようにしておくこと。次に取組む人の主体性や見方に、うまくブリッジできるような形でまとめておくことは有意義だろうし、今回のプロジェクトだけで終了せず生き続けられると思う。

日高 この事業が始まった5年前と、日本の状況は大きく変わり、いまTRECプロジェクトの意味がとても重要になってきたと感じる。そして大学に求められるのは、経済をどう支えるか、研究開発の人材をどう育てるかの側面。そのヒントとして、このプロジェクトのなかに工学的アプローチ、デザイン的アプローチの両方が含まれている。企業にはそのような体力がない。その意味では、すぐに成果結果がでなくても、ぜひ継続して行ってほしいと思う。

御手洗 確かに、ここ数年間の変化はすごいと思う。経済の変容があり、それがプロダクトデザインの変容になっている。富山県は民藝のふるさと。新しい時代のプロダクトデザインは、大量生産時代のものとは異なるものが求められていることを考えると、民藝の故郷の富山、

そこにある富山大学の果たす使命は大きいと思われる。

前田 そのあたり今回は参加が叶わず向井周太郎先生から話が聞けないのが残念だが、確かに地域性、歴史の中でものづくりのつながりがあり、その大切さというのは近代産業とは違った意味で根を生やしていると思う。

■第1部 アドバイザーミーティング

富山大学 芸術文化学部

前田 一樹、近藤 潔、古池 嘉和、
矢口 忠憲、福本 まあや

TREC アドバイザー

廣瀬 禎彦、日高 一樹、酒井 俊彦、
御手洗 照子、竹村 譲

富山大学 地域連携推進機構 産学連携部門

高辻 則夫、千田 晋

■第2部 統括報告会 フリーディスカッション

「TRECの特色ある活動には、新たな視点のイノベーションを起こしてくれることを期待する」という文部科学省・工藤氏の挨拶に続いて、秦学部長が「このTRECで着目したのは〔職人技のブランド化〕であり、職人の持つ卓越した技を世界に発信する取組みとするためにも、今日は忌憚のない意見をいただきたい」と挨拶。前田コーディネーターが、まず5年間にわたる活動概要を紹介し



富山大学
芸術文化学部
前田 一樹



TREC アドバイザー
廣瀬 禎彦



TREC アドバイザー
日高 一樹



TREC アドバイザー
酒井 俊彦



TREC アドバイザー
御手洗 照子



TREC アドバイザー
竹村 譲



たあと、廣瀬アドバイザーからの提言を皮切りに、フリーディスカッションが行われた。

廣瀬 5年間にわたったTRECの報告で終わるのではなく、それを大学の仕組みの中に取り込むことで研究成果を活かしていける。そこにこのプロジェクトの魅力があるのではないか。研究が研究で完結し、内容を図書館に収蔵して終わりという流れはよくあるが、ぜひ大学のカリキュラムに落とし込み、組替えて、伝統技術のエッセンスを継承して行ってほしい。

坂下 発展的に生れたものの一つに「高岡地域職人技のブランド化推進協議会」があり、委員長をさせてもらっているが、協議会での議論をもとに、市の事業としてもこれまで取組んできた人材育成に加え、新たな方向性も示唆されている。職人技のブランド化、価値を高めることについて、今後も継続した協力をお願いしたい。

工藤 地域の協議会に産学官連携がベースとなっている取組みは全国各地に多くある。この連携に、高岡では伝統工芸を中心に据えているわけであるが、非常に興味深いと思うのは、価値があるとみなされているものの価値の本質はどこにあるかを探るプロセスである。それらは具体的な解決策を提示するものになり、産学官連携が多少袋小路に入っている現状のブレイクスルーとなるのではないかと感じている。

前田 実際に現場と教育ををどうつなぐか、プロジェクトとしては夜にワークショップを行い、学生たちと共にものづくりに携わる方々が共通のテーマを持って知恵を絞り、価値を見出すきっかけの場づくりを試みてきた。

遠藤 私は神経外科医で外科手術を行ってきた。医療にはサイエンス、アート、ヒューマニティが必要。サイエンスは科学であり、知識、経験、能力とも言い換えられる。アートは技術・技能・創造、ヒューマニティは人間性。どの分野でもサイエンスとアートは必要で、サイエンスの部分を大学で教えて、アートの部分は現場で学ぶものだと考えていた。産学連携といった際に、現場を共有しないでは言葉だけのものになるだろうと思う。

日高 5年前にTRECが始まったときは、「伝統産業に対する大学の一般的なアプローチ」だと思っていたが、いま振り返ると、この活動は今後の日本に本当に必要なものであった。一番重要なのは現場。デザインアプローチと呼んでいるが、社会にある課題や問題を洗い出して、いろんな技術をアプリケーションの力で結び付ける。人材教育も含めて非常に意味があると思う。

工藤 TRECの取組みは結果的に、何が価値があるか探し出す、データ化する、そのプロセスをマニュアル化しているいろいろなどところできるようにすることが草の根のイノベーションにつながる。

坂下 データベース化すればすべての技術が同じような



前富山大学
芸術文化学部

近藤 潔



富山大学
芸術文化学部

古池 嘉和



富山大学
芸術文化学部

矢口 忠憲



富山大学
芸術文化学部

福本 まあや



富山大学 地域連携推進機構
産学連携部門

高辻 則夫



富山大学 地域連携推進機構
産学連携部門

千田 晋



レベルになるわけではない。技と感性の境目が発見できたのではないか。この知見と方法を活かし、歴史的な視点を加えることで価値化を図ることができたらと考える。

岩田 データベース化ということでは、音という不可視で、発せられてもすぐに消えてしまうものを対象としたことに非常に感銘を受けた。これが可能ならばいろんなことができるだろうと感じた。

大澤 後継者問題についても大学から心配してもらい、いききっかけになった。同じことをしていても感性というものがある。私たち職人としては興味を持つ、なぜどうしてという気持ちを忘れてはいけないし、一途さが大切である。その上で、皆さんに安心して制作できる環境づくりを応援してほしい。

近藤 科学技術は先端的取組みであったり即座にビジネスにつながる、イノベーションになるなどの面が取りざたされることが多いが、TRECの場合はもっと下支えること、一歩表からひいたもの、継続するものを目指した。

廣瀬 きれいな音の梵鐘、きれいでない音の梵鐘の地金の違いがデータとして出ている。これがなければ主観でしか話せない。なぜきれいか、きれいでないかを教えてはじめて、耳の感覚だけではない判断がつくわけである。音のスペクトラム、音という不可視なものの美的判断は、何年も音を聞いて鍛えるのではなく、視覚化したもので教育することで短いスパンで伝達できる。これをカリキュラムとして引っ張り出す。ただし、そのようなカリキュラムがいまの4年間の中に納まるのか、座学だけで習得可能なのかという問題はある。したがって講座のつくり方は、研究の成果から教育に落とし込むときに、やりやすいものとそうでないものがあるし、課題はあるが可能だと思う。

その後、報告会を聴講していた学生からもTRECプロジェクトへの積極的な質問があり、最後に遠藤学長の「日本はあまりにも経済追求の価値評価で物事を判断してきた。一番目を向けられなかったのが文化。文化をどう位置づけて教育するか、どう遺していくかは、我々共通の

課題であると思う」との挨拶で、TRECの発展的な総括報告会は幕を閉じた。

■第2部 統括報告会 フリーディスカッション

工藤	雅之	文部科学省	大学技術移転室
岩田	則子	経済産業省	中部経済産業局
大澤	光民	高岡地域文化財等修理協会	会長
坂下	照夫	高岡市産業振興部長	
廣瀬	禎彦	TREC	アドバイザー
日高	一樹	TREC	アドバイザー
遠藤	俊郎	富山大学長	
前田	一樹	富山大学	芸術文化学部
近藤	潔	前富山大学	芸術文化学部

■TRECアドバイザー 向井周太郎 提言

■art概念の分化と再統合

近代以降、理系文系芸術分野の分化が進んだ。ギリシャ語のtechne、ラテン語のartは本来、人間の身体と結びついた横断的な総合概念である。近代の産業革命以降、アメリカはすぐ工業化に入ったが、ヨーロッパの場合は手仕事が残っていたため伝統工芸の近代化という過程が介在した。イギリスではウィリアムモリスなどが伝統工芸に戻ることを主張したが、大陸では職人技の上に立ちながら近代化して行った。ドイツのギルド組織などは今の時代になって却って産業の大きな力となっている。

ものづくりには感性だけではなく科学的な論理的分析力や構築力が必要である。一方科学的な問題解決の技術には、心地よさや美的判断に関わる全体性が求められる。最先端技術は芸術や工芸と違うもののように思われるが、大量生産大量消費社会の中で科学と結びついて専門化した技術としての、一種の職能知となったデザインは、芸術といったartの広義の意味を改めて全体として捉え直すことが大切である。教育に取込む際にもそのようなコンセプトが必要なのではないか。TRECプロジェクトは科学・技術的な面と感性的な問題を並行的に全体として捉える試みであったと思う。